

## －開催抄録－

### パブリックデザインセミナー（第5回）：セミナーテーマ・利用

『居場所をつくる－まちなか公共空間の積極的利用と戦略的活用－』

1月27日、日本大学理工学部 駿河台キャンパス5号館524号室にて開催されました

パブリックデザインセミナー（第4回）：セミナーテーマ・利用『居場所をつくる－まちなか公共空間の積極的利用と戦略的活用－』は、2017年1月27日（金）午後6時より日本大学理工学部駿河台キャンパス5号館524号室にて開催されました。

今回は、PDCの活動のメインテーマとも言える公共空間活用について、札幌市職員として様々な取り組みの中心的な立場で携わってきた工学院大学建築学部まちづくり学科の星卓志教授にご講演いただきました。

#### ●『居場所をつくる－まちなか公共空間の積極的利用と戦略的活用－』

工学院大学建築学部まちづくり学科教授：星 卓志氏



#### 【講師プロフィール】

星 卓志氏（ほし たかし）/工学院大学建築学部まちづくり学科教授/一級建築士、技術士

1985年北海道大学大学院環境科学研究科環境計画学修了、2001年博士（工学）取得（北海道大学）

1985年札幌市に入庁。都心まちづくり推進室長、都市計画部長等を務め、2013年工学院大学教授に就任。札幌市在籍時には、第4次札幌市長期総合計画の策定、土地利用計画制度の総合的運用、都心まちづくり計画、緑を感じる都心の街並み形成計画、札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）・創成川公園の基本計画策定、北3条広場（AKAPLA）の計画調整など、都市計画、都心まちづくり等の計画行政に携わった。

現在は、都市構造論、エリアマネジメント論、まちなか公共空間論等を研究テーマとし、実務として（一社）横濱まちづくり倶楽部理事、豊田市都心地区空間デザインアドバイザー等を務めるほか、新宿副都心地区の公共空間改善のプロジェクト等にも携わっている。

星氏からは、まず「まちなかの公共空間」についてのお考えをご披露いただきました。

自動車社会の前の街路は人のための空間だったが、現代は自動車を効率的にさばくための都市が構築され、歩行者にとっては歩きづらいまちとなってきたと説明され、現在の日本では、歩行者空間を充実する方向に向かっていると述べられました。

その上で、公共空間の概念として、サードプレイス（第三の場所）という考え方を紹介いただきました。義務的・目的的なファーストプレイス（家）、セカンドプレイス（職場、学校）に対して、サードプレイ



スは、みんなが平等、気楽に立ち寄り、アクセスしやすく、精神的なリフレッシュできる、自分の居場所だと思える場所であると述べられました。

工学院大学がある新宿副都心における取り組みとして、公開空地に椅子とテーブルを置き夜の宴会を開いており、サードプレイスとして3時間静かにゆっくり過ごせる場づくりとして広めようとしているお話がありました。また、富山市のグランドプラザやニューヨークタイムズスクエアの様子についてご紹介いただきました。

また、ル・コルビュジエが示した自動車をさばくための現代都市よりも、このような公共空間を活用する事例の方が現代都市では当たり前であり、「通る」よりも「過ごす」空間が大切であると述べられました。

公共空間の積極的に活用管理にエリアマネジメント組織に委ねることが広まっているとした上で、その長所として、自由な発想で市民ニーズに即応できることを挙げました。

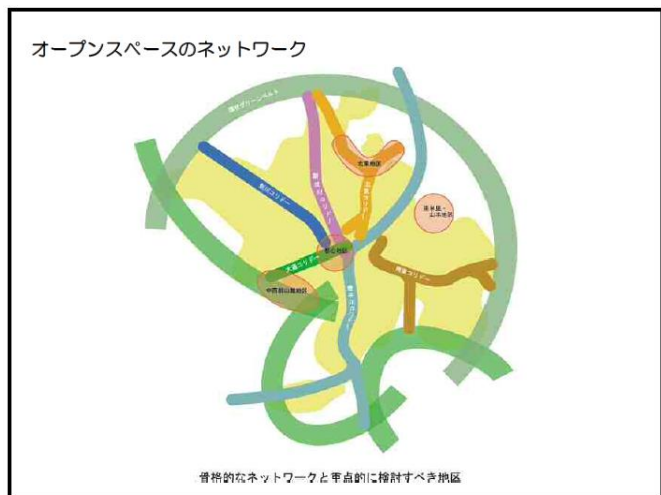
札幌市では、2000年に道路に椅子とテーブルを置く実験が始まったが、今は丸の内仲通りではレストラン営業を可能しており、これはエリアマネジメント団体が全体を監修しているため、法制度面の制限をブレイクスルーできたと述べられました。

エリアマネジメント組織に対する権限委譲も進んでおり、一例として、横浜市グランモールの公開空地の管理について紹介されました。



#### ・札幌のオープンスペースネットワーク構築の歴史・経緯

ここから、札幌市のお話をいただきました。札幌市でランドスケープを都市のフレームワークとして捉える動きが出た当初、公園配置の優先順位は低かったが、その後、オープンスペースネットワークの重要性を認識し、ウィリアム・ジョンソンと共に計画を開始したとのエピソードをご紹介いただきました。この計画は、川や線路跡地など既存ストックを少しずつ手直ししながらオープンスペースを作るものであるとご説明いただきました。

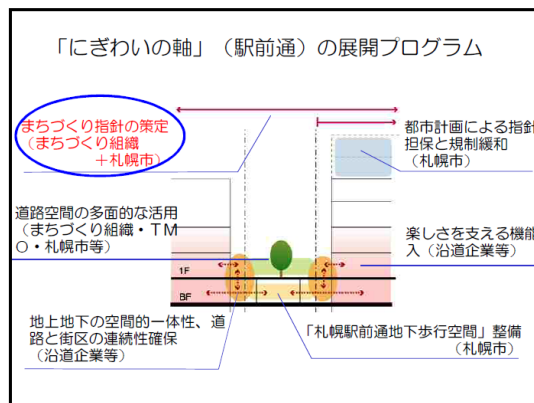
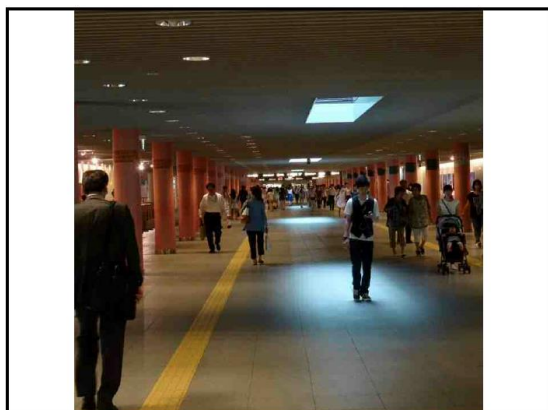


#### ・札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）の整備について

道路や公園などのオープンスペースの軸として、沿道、建物との関係性を持ちながらさっぽろ駅と大通をつなぐ地下歩行者空間（チ・カ・ホ）の計画について説明いただきました。単なる地下道ではなく、かつ地下商店街を作るとものでもなく、道路（地下歩行空間）の上に広場条例を適用して憩いの広場とし、2011年3月に完成したことを紹介されました。

地元の振興会は、当初話を聞いてくれなかったが、地下北空間や都市開発事業が進展する

現実を目の前にして、会長が協議会の設立を宣言し、設立にいたったという経緯、また、協議会での議論した結果は「この空間が公共空間とし人々にとって快適な場所になるか」という計画であり、地権者全員が合意した都市計画提案となったとのエピソードを紹介いただきました。



(※写真：星教授作成の当日レジュメより引用)

・北3条広場 (AKAPLA) の計画調整のエピソード

道路法上は、道路には「滞ってはいけない」ため、椅子を置いたりイベントを行うことは例外中の例外であるため、我々は道路をなくすことを考えたという経緯を披露いただきました。地下埋設物の移設にはお金がかかるため、地上を広場、地表面から下は道路とし、併用工作物協定を締結したという方策をとったとご説明いただきました。この協定自体は珍しいものではなく、これにより理想的な広場として使えるようになり、まちづくり協議会が指定管理者となっているとご紹介いただきました。



(※写真：星教授作成の当日レジュメより引用)

現在、日本各地のエリアマネジメント団体の大半は、企業がお金と人を出しているが、紹介した札幌市の事例では、2つのまちづくり会社に対して企業はお金を出さず、自立的に経営され、行政と一体でエリマネをしていると説明いただきました。

質疑応答では、欧米のように居住空間が集約されていることが必要ではないかという質問に対して、都市の魅力である多様性を提供するという意味では、人がいて、需要があり多様な供給があるということが健全な姿であり、居住空間、商業機能、都市機能をどうミックスしていくかという点については計画的に進めなければならないといとご回答いただきました。